

# 信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

池田工業高等学校

## 崑崙山脈「阿克沙衣峰」(6770m未踏)偵察行 その6

### 失意のうちに撤退

7月31日 私の体調は昨日の326km地点での「キジ」を最後に完全に復調し、昨夜からは食事もできるようになった。今朝も食欲が普通に出てきて、高度の影響も全くない。こんなに万全になったにも関わらず、今日はこの地を後にして帰らねばならないのか？今朝になって何か新しい情報が手に入ったということはないのか？・・・ヌルさんは名コックである。たいてい2品のおかずを作ってくれるが、料理の手際もよく味付けも極めてうまい。ようやくその料理を味わえるようになってきた。食事が終わったところで撤収準備をする前に、もう一度ヌルさんに「やはり残りたい。」と伝えたが、「大西さん、やはりだめだと思います。この状態を打開するためには軍が動くしかないが、軍といってもそう簡単には動きませんから。」と言うのが、彼の返事であった。考えて見れば、ここは中国・パキスタン・インドの国境未確定地域であるのだ。軍が不用意に動くことはできない地域なのだなあと思い至る。高度順応もうまくいき、これからというところでの撤退に元気は出なかった。

10:30 あたりは真っ青な空が広がり、マザー峰が白く光る中、後ろ髪を引かれる思いでマザーをあとにする。我々の車はタクラマカン砂漠の砂塵と精製度の悪い粗悪ガソリンのせいで途中フィルターがつまり、そのたびに修理をしてみました進んでいく。秦さんはもともと自動車の整備士だったそうで、その点で安心だが、こう何度も何度もエンストを起こすと心配になる。車の修理中は我々の写真撮影タイムであり、またキジうちタイムでもある。慌てない慌てない、一休み一休み。何度中国へ来ても、こ



セラック峠からの眺望

の光景は変わらない。11:35 セラック峠(4830m)着。往路はガスの中だったが、今日は無風快晴。素晴らしい景色が広がっている。こんな風景を高校生が見たらそれだけでも感動するだろうなあ。峠を境に谷の形状が変わり、景色も一変する。先ほどまでは広い谷だったが、今度はV字谷である。12:15、195km地点でようやく舗装路に出て一安心。ここまで来るともうすぐクディだ。12:50 クディ。帰りの検問はフリーパスだった。最も我々は何もせずただマザーのちょっと先まで行っただけなのだからそれも当然か。ここからアカズ峠への道は、往路は感じなかったのだが、かなり悪い。その上峠越えをするあたりから雨模様となった。道はすでにそれまでの雨でぬかるんでもいる。入山前夜も雨、そして今日もまた雨。今日の出発時は青空が広がり、それはそれで後ろ髪を引かれる思いが強かったのだが、この午後からの雨はまた、すっきりしない気分追い打ちをかけるような辛い雨だった。

アカズ峠を越えるとまたまた景色は一変し、少しずつ緑が増えてきて、なんとなくほっとした気分になる。ククヤ村で遅い昼食をして、イエチョンに到着したのは17:3

0だった。結局、これで今回の偵察は終わりである。なんだかあつけない。「いっそのこと帰りたいよね。」久根さんのことばもわかる。少し頭痛がするという久根さんと酒を飲まないヌルさんを残して、食事のあと、周さんとイエチョンの屋台へ出た。草魚のカバブ風が美味。開いたものをいったん、炭の遠赤外線乾燥させ半干物状態にして、そこに新疆風の味付けをして焼くのである。ホータン（和田）やクチャの屋台でも鮓、鯉などの料理を見かけたが、ウイグルでも結構魚を食する文化があるのだと知って驚いた。

### 西域南道からアクサイ峰を山座同定



洪水で荒れた西域南道

8月1日 ずっと車に乗りっぱなしで運動不足気味なので、早朝散歩に出かけた。朝早くからナンを焼いて売る店、生きたままの鶏が売られ朝からそれを買っていく人、日本では失われ

た田舎の景色が郷愁を誘う。10:30 イエチョンからホータンへ向けて出発。ピシヤン（皮山：ウイグル語ではグマ）に入ると西域南道の至るところで道路決壊が起きていて驚いた。一部はまだ次から次へと水が流れてきて道路の縁で行き場を失いそのまま道路沿いに濁流が流れ、弱いところを崩してさらに流れていく。こういった形での冠水や決壊が至る所で発生している。沙漠がそんな洪水の傷跡をさらしているのを見るのは、10年ぶりのこと。2000年隊で訪れたとき、ホータンとケリヤ（迂田）の間で見たのと同じ光景だ。あの時は「100年に一度の洪水」と言われたものだが、現地の人言によれば、今年はそれ以来の洪水だそうだ。どうして我々が来るときに限ってこうなのだろう。雨を運んでくるのは「久根さん」じゃないの？そんな冗談をたたきながら2000年のときの遠征を思い出した。昨日ホテルで見たテレビからは、パキスタンの洪水やクチャの洪水のニュースが流れていたが、2010年という年はやはり特別な年のようだ。水は乾いた沙漠を大いに潤して縦横無尽に流れていく。

南に崑崙の嶺々が雲の彼方に見えてきた。そんな山脈の一角をじっと見つめていたヌルさんが、「大西さん、あれがアクサイ峰かもしれない。」と指さした。車を止めてコンパスとGPSを使いながら現在地を同定し、その山の方角を確認する。あれが「ハーンヤイリク」とその左に見える山について断言するヌルさん。「ハーンヤイリク」は香川の川井先生が労山系の山岳会のメンバーとして登った山でヌルさんはそのときの連絡官だった。そこから少し右に寄ったところに目立つピークがあり、その右にほぼ同じ高さのややごつごつしたピークがあった。地図では、我々の目指すアクサイ峰の東方に双耳峰があった。ハーンヤイリクとの位置関係もまず間違いないだろう。GPSによればその山は現在地から136kmも離れた位置にある。双眼鏡を出して見る。念のためにと僕はスティルカメラと望遠レンズを持ってきていたので、早速それをつかって写真を撮った。洪水で龍がのたうちまわったような沙漠の彼方の雲上に浮かぶピラミッドは、アクサイ峰の北西面にあたる。実際に登るにあたっては何の役にも立たないが、山座同定ができただけでも嬉しかった。そして、これが唯一今回の偵察で目にしたアクサイ峰だった。



沙漠の彼方にアクサイ峰を確認（中央右）